

共通教育教養科目「主題探究型科目」におけるアクティブ・ラーニングを促すための手法の解説(教員向け)

2019年度版(1/2)

◎主題探究型科目は、8回で1単位の講義科目であり、実習科目(15回で1単位)ではないので、実習・実技・野外調査・グループワーク・プレゼンテーション等の活動は、全8回の授業時間の一部に留めてください。また、これらの活動は、**教員の指導のもと正規の授業時間内に実施**するようにしてください。

手法	概要	主題探究型科目を担当する際の留意事項
Problem Based Learning/ Project Based Learning	問題解決を主目的として、学習者主体で実践される少人数グループでの学習を Problem Based Learning と呼ぶ。また、具体的な学習課題をたてて、一人ないしチームでプロジェクトを遂行しながら行う学習を Project Based Learning と呼ぶ。いずれも学生が自主的に学習することが求められる。	「ペア・グループワーク」や「プレゼンテーション」等と組み合わせて実施することが想定されますので、これらの手法の解説もご参照ください。学生が主体となり課題を解決する方法を考え、計画を立てて学習を進めるという、初年次の学生にとっては比較的高度な学習法ともいえるので、課題のレベル設定や適切な学習支援(チューターとしての役割など)に、特にご配慮ください。ポートフォリオの利用も考えられます。
調査	教員が提示したテーマや課題に対して、図書館等で参考図書、新聞・雑誌、統計資料を調べたり、DVD映像やインターネットのメディアを活用して情報収集を行い、結果をまとめる学習方法である。	単にレポートを課すだけでは、アクティブ・ラーニングといえません。学生によるプレゼンテーションへつなげて相互の学び合いを促したり、双方向型執筆演習として十分なフィードバックを行い情報の質を高めたり、調査内容を学生たちの興味関心に沿いながら深めたりなど、調査の成果を用いて学生がさらに学修を深めていく工夫が重要です。
実習	講義などで学んだ技術や方法を実物にあたって学ぶこと。学生が実際に行動することによって理解を深めると同時に、態度面の向上が期待される。	実習・実技は授業の一形態であり、実習・実技を行ったからアクティブ・ラーニングをしたとは、単純に言えません。授業の大半を占める講義形式の内容・知識と、実習・実技で身につける知識・技能とが有機的に結びついた学修となることが望まれます。50名程度で実施可能な内容とし、特別の予算や多数のTA配置を前提とする授業計画は立てないようにしてください。
実技	技術や演技などを実際に行うこと。知識や技術に対する実際的な理解を深めると同時に、態度面の向上が期待される。	
実験	理論や仮説が正しいかどうかを、様々な条件の下で様々な測定を行い確かめてみる学習方法である。学生が知識を活かして実際に行動することによって理解を深めると同時に、結果を整理してまとめる力を身につけることが期待される。	50名程度の受講者で実施可能な実験であることが必要です。共通教育センターで準備できる範囲の部屋や器具類で実施計画を立ててください。特別の予算や多数のTA配置を前提とする授業計画は立てないようにしてください。教員による演示実験は、現実的な選択肢の一つです。実験を通して主題に対する探究を深めていくことが大切です。実験の内容を各自が十分に理解し、既に修得している知識や経験と結びつけながら、実験を行うことが能動的な学習につながります。
ロール・プレイング/ シミュレーション	現実に起こる場面を想定して、参加者がそれぞれに与えられた役を演じ(ロールプレイ)、疑似体験(シミュレート)する学習方法。技術・技能の修得や、現実的なケースにおける態度・姿勢の涵養、他人の立場への理解などを促進したい際に効果的である。	ロールプレイやシミュレーションを取り入れるためには、その事柄に対する知識・理解が必要です。また、教員による適切な場面の設定と、役割分担を話し合い等を通して決めるなどの学生相互の関わりも重要になります。

◎主題探究型科目は、8回で1単位の講義科目であり、実習科目(15回で1単位)ではないので、実習・実技・野外調査・グループワーク・プレゼンテーション等の活動は、全8回の授業時間の一部に留めてください。また、これらの活動は、**教員の指導のもと正規の授業時間内に実施**するようにしてください。

手法	概要	主題探究型科目を担当する際の留意事項
ペア・グループワーク	<p>教員から与えられた課題に対して、ペアもしくは小グループ(2人から6人程度が一般的)でお互いに力をあわせ、助け合いながら学習を進めていく協同学習のことである。グループ構成員がお互いに顔を合わせて語り合い、協力して共同作業をする。</p>	<p>作業手順を明確化することが重要になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決への探究方法や手がかりをどのように準備するか ・観察・実験等と組み合わせるのか ・講義とのつながりや時間配分などの授業構成 <p>などを考え、各回の具体的な構想を立てましょう。</p> <p>また円滑なペアワークやグループワークを行うために、協同学習の考えを取り入れながら授業の準備や設計を行うことが望まれます。それぞれが明確な役割を持ちながら学習を進めるような課題の設定をし、また互恵的な協力関係が作られるような人間関係が作られるよう、働きかけを常に行ってください。</p>
ディスカッション/ ディベート	<p>ディスカッション:グループでの討議・話し合いのことである。学生同士の相互作用を通して、各人の持つ知識・経験・性格などが共有され、相互に成長することが期待される。自由討議法の場合、内容も役割も自由に議論することになる。</p> <p>ディベート:課題討議法の一つで、ある公的なテーマについて肯定側と否定側に分かれて、立論・反論といった論戦を行う。ディベートを通して、自分なりの意見や問題意識を持ったり、論理的な考え方ができるようになるといった効果が期待される。</p>	<p>50名程度の受講生を一度に対象とした討議は一般的とは言えません。どのようにすれば討議が可能なのかという授業設計が必要です。小グループで交代しながら討議を繰り返す場合には、それ以外の学生が果たす役割を明確にしておく必要があります。成績評価方法についても明確にし、予め受講生に示しておくことも重要です。また、テーマの難易度が高すぎる場合にはうまく機能しないこともあるため、教員は進行をよく観察し、時には介入することも必要です。</p> <p>学生同士で議論させる機会を作るだけでなく、議論を行うための知識や経験を持たせた上でお互いの考えを深めたり、議論の結果としてそのテーマに関する学習を深める意欲につながったりするように、授業を設計してください。</p>
プレゼンテーション	<p>指示されたテーマや課題について、グループもしくは単独で調査・学習を行い、聴衆の前で発表することである。発表形式は、パワーポイントなどの情報機器を活用したものや、ポスターセッションなど様々である。発表後は、他の受講生や教員からの質疑に応答する。</p>	<p>プレゼンテーションの回数と成績評価方法を予め明確にしておく必要があります。約50名の受講者数も念頭におき、プレゼンテーションをする学生としない学生が出るようであれば、プレゼンテーションをしない学生がその回に何を学習を深めるのか、その方策と評価方法も明確にする必要があります。また、プレゼンテーションを聞くことが、学び合いにつながるように、質疑応答の時間を十分に確保することや、プレゼンテーション後に各学生が何を学んだかを振り返る機会も設けることなども考えてください。</p>
双方向型演習	<p>与えられた課題やテーマについて、学生が答案やレポート・小論文・振り返りシートを作成し、それを教員が添削・採点してフィードバックしたものを、再度学生が確認し理解を深める学習方法である。教員とコミュニケーションをとることにより、学習意欲を引き出すねらいもある。学生は自らの理解度を確認し、新たな気づきや課題を見いだすことが期待される。</p>	<p>学生の能動的な学習を引き出すところにねらいがあります。出題した課題の解答例や解説を示すとともに、双方向型演習としてのフィードバックが不可欠です。</p>